
DRAGON BALL - ページIn -

上原さん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DRAGON BALL - ページイン -

【Nコード】

N1674W

【作者名】

上原さん

【あらすじ】

知らないうちに事故にあい、死にかけの主人公が神様に貰ったプレゼント。

それは自分で作る漫画「DRAGON BALL」
しかもなるべく原作に合わせろ!?

主人公はオリキャラでいきます。

なるべく原作通りに進めたいと思います。

プロローグ（前書き）

閲覧ありがとうございます

次のページからスタートです

プロローグ

俺「ここはどこだあ？」

辺り一面真っ白なところに、俺は突っ立っているの……。

なんかよくテレビでありそうなのに、たしか、さっきまでチャリ漕いでた

俺「おーい！ 誰かー！」

まあ、見渡す限り人いないんだけど。

????「呼んだ？」

叫んだらめっちゃ裏から声がした。ビビりながら裏向くと、じいさんがいた。しかも外見が神様みたいな。

俺「わっ！ あー、人いたんだあ。あなたは誰っすか？」

神「ワシ？ 神。」

……いやいや、自分から神って言う人小学校以来だし。服装とか外見は神様っぽいけど、まだ俺死んでないし。

神「死んではいけないけど、今は死にかけかな。」立派な顎髭を撫でながら言った。

俺「なんで考えてる事解ったの!? しかも死にかけってどうゆうこと!？」

思わず叫んだ。

神「自転車に乗っている最中に大型ダンプに追突されてな、今は集中治療室で昏睡状態だ。」

俺「俺は死ぬのか!? 教えてくれよお爺さん!？」

神「神だつての! 大丈夫、お前は助かる。」

俺「ほんとに!? ありがとうございます神様!」

とにかく土下座しまくった。

神「土下座までしなくてもいいんだが……。まあ偶然哀れな事故見たからついここに呼んだわけだ。」

俺「そうだったんですかあ。知らなかった。」

神「つくづく哀れだなあ。まあ何かの縁って言うからお前に何かプレゼントを用意してやろう。」

俺「マジで!?! ありがとうございます!」

神様は手の平を下にかざすと、何かが表し始めた。

神「いいだろ? コレ?」

俺「こゝ、これは?」

ブログ（後書き）

こんな感じで進めたいと思います
思いつきで始めたので更新は不定期ですがよろしくお願ひします

第一部・神様のプレゼント（前書き）

閲覧ありがとうございます！

三日坊主で終わらなきゃいいけど……。

第一部・神様のプレゼント

俺「ドラゴンボールだ!？」

あの名作のドラゴンボールが全巻新品で目の前にある。
俺はデ
ンションが上がった。

俺「これ、本当にくれるの?」

神「もちろん。」

俺「ヨッシャー!」

神「ただし、中身は作ってもらおう。」

俺「へ?」

急いで手にとって中身を見ると、何も描かれていない。
他のも
見るが、中身は白いままだ。

俺「これドラゴンボールじゃないだろ!」

神「だから作れ!」

言ってる事が意味わからん。
プレゼントなのに自分で作れと…
しかも俺、絵なんか書けねえよ。

神「大丈夫だ。 やれば出来る。」

俺「やれば出来るじゃねえよ！ 塗り絵ならまだしも書けるかい！」

このまま本投げつけてやろうと思ったけど、神様だからやめた。神「じゃあ中に入って作れ。」

俺「へ？」

中に？ 無理だろ。

神「小中学の時はあだ名が遠藤からエドだな。 ぴったりだ。」

何か話が勝手に進み、神様が一卷を手に行っている。

俺「確かにエドと呼ばれてたけど、何する気だ？」

俺が聞くと神様は笑って誤魔化する。 そしてもう片方の手の平をかざすと、

神様「では、行ってこーい！ーい！ーい！ーい！」

俺「ちよっと待っ……」

剛はまばゆい光を放つと消えてしまった。

第一部・神様のプレゼント（後書き）

最初は更新早いです

段々遅くなっていきますが、がんばっていきます

第二部・まずどう？（前書き）

閲覧ありがとうございます

良い感じで投稿出来ます

今んところは……

第二部・まずどこ？

目を開けると、俺は道に立っていた。

どうやら、変な夢でも見てたようだな……。でもドラゴンボール全巻は欲しかったなあ……。それにしても、なんか帰ってきたとこ田舎過ぎるんだけど。道はあるけど舗装されてないし、家無し畑も無いし……。どこだよここ？

……ウウウウン……。。

ん？ 何か上から音がする。

…ヒュウウウウン。

上からはかデカイ翼竜落ちてくるんだけど

ズズーン

…か？ 丈夫か？ 大丈夫か？

あ、あれ？ 何か聞こえるぞ。

神様「大丈夫か聞いたるだろうが……！！！！！！」

俺「あゝあゝあゝああああ！！！！！！」

俺「耳元で叫ぶなや!!」

神様「いや、埒あかんから仕方無いだろ。」

俺「マナーを知れ!」

どうやら降り出しに戻ったようだ。

俺「まあいいけど。それより、さっきの何だよ?」
知ってるでし

神様「知ってるけど知るとへこむよ?」

俺「とりあえず、言ってくれ。」

神様「ブルマを誘拐した翼竜を悟空がやっつけたが、偶然にもお前の真上に落ちた。」

……. どんだけ俺不運なんだ? 酷いぞコレ…….

神様「んで、今は気絶してるところを意識だけ呼んだわけだ。」

俺「なるほど。 ってかよく気絶で済んだんだな。」

神様「まあドラゴンボールだから大丈夫だ。」

俺「いろいろ便利だな。」

神様「そろそろ意識が戻るだろう。もし困ったら空に向かって
ワシを呼べ。」

俺「わかった。ちなみに、一巻からだな？」

神様「そうだ。ってかタメ口やめろよ。神様だからな？」

俺「了解。」

そう言っていると、また光に包まれた。

第二部・まずとじろ？（後書き）

三日目ですね

少しづつ頑張ろうって思います

第三部・初対面（前書き）

いよいよエドがあの人と会います。

第三部・初対面

俺「う…う…。」

目を開けると、俺は道の上で寝かされてた。　　というか倒れていた。　　体を見ると、本当に無傷だったから驚いた。

????「早く助けなさいよー!!」

????「降りればいいじゃねえか。」

????「降りれるかー!!」

すぐ近くで言い合ってるような声がする。　　まず声がする方向に向かって歩くと崖に宙ずりになっている女の人と、隣の岩で大笑いしている少年がいた。　　何してんだ？

俺「おーい、なにしてんだー？」

少年「あいつ、あそこから降りれねえんだよ。」

俺「そりゃ無理だろ。」

女の人「はよ降ろせー!!」

俺「とりあえず、降ろそうか…。」

女の人「はあ……とんだ目にあつた

わ……。」

俺「一体、どうしたんですか。」

女の人「私が恐竜に拐われたのに孫君が助けに来なかったのよ。」

俺「孫君？」

女の人「その子よ。孫悟空って名前。物凄く強いよ。」

ちなみに、私はブルマよ。」

悟空「オッス！」

俺「オッス！　じゃなかった。で、ブルマさんは連れ去られた後助けて貰ったわけですが、その恐竜って翼ありました？」

ブルマ「あつたわよ？」

俺「なるほど。お前らか！？」

事の経緯を話すと、謝るところかそんなに強いんならしばらく着いてきて欲しいと頼まれた。護衛だそうだ。まあ行く宛も無いから着いていくことにした。

第三部・初対面（後書き）

と言うことで、出だしからそこそこ散々ですね

次はまた神様が出てきます

第四部・ふと違って神様に（前書き）

主人公ステータス

エンドウツヨシ
遠藤剛ノエド

外見は事故にあった時から変わらず、白いT・シャツにジーンズ。

（現在形）

内面は大雑把でそそっかしいが、責任感はある。 当然、血液型
はO型。

第四部・ふと思って神様に

俺「あつ…。」

悟空「どうした?」

俺「いや、ちょっと待っていてくれ。」

とりあえず、草むらに走り出す。　　そう言えば聞いてなかった
気がする。

悟空「なあんだ、あいつもシヨンベン草むらですんのかあ。」

俺「違うわ!　　いいからちょっと待ってとれ。」

俺「オーイ!　　神様あー!」

どうしても聞かなきゃ。　　あの事を。　　そして、目の前が眩し
く真っ白になった。

目を開けると、例の場所に着いていた。

神様「あんまり頻繁に呼ぶなよ。」

俺「どうしても聞きたいことがあってな。」

神様「なんだ、言ってみ?」

俺「俺向こうだと現世の記憶はあるが何故ドラゴンボールについては記憶が無い？ それとエドより本名の剛の方が良いんだが…。」

神様「そんな事か。記憶が無いのはあつたらワシがつまらんからだ。名前はエドじゃなきゃならん。」

俺「何でだよ。ブランクあるから何かしっくり来ないんだよ。」

神様「そんなん慣れるわ。」

俺「記憶もあつたら楽だったのにな。」

神様「原作者も無から作ったんだ。お前もパクらずにやりなさい。」

俺「わかりました。」

神様「あと頻繁に呼ぶな。どうしても時だけだぞ?。」

俺「はいはい。」

神様「はいは一回!。」

俺「は〜い!。」

神様「伸ばすな!。」

俺「あんたは先生か! もう良いから戻してくれ。」

神様「お前から呼んでくせに…。じゃあ、頑張れよ。」

また、目の前が真っ白になった。

俺「お待たせ。」

草むらから戻ると悟空とブルマが待っていた。けど、十分も経っていないようだ。

悟空「おせえよ。」

俺「悪かった。早速行こう。」

ブルマ「そういえばあんた、名前聞いてなかったわね。」

俺「名前？　確かに言っ てなかったな。」

本名か、あだ名か。　迷ったがこう答えた。

俺「名前はエドだ。　よろしく。」

第四部・ふと思って神様に（後書き）

神様はなんでエドにこだわるんでしょうか？
その話はこれからと言っことで

第五部・尻尾？（前書き）

何とか早い更新です

第五部・尻尾？

悟空「なあ、オラ腹減った。」

俺「俺も腹減った。」

バイクに乗って、数時間。 飲まず食わずだったので、流石に空腹は我慢出来ん。

ブルマ「暗くなってきたし、今日はここまでね。」

バイクの速度が落ちてきて、完全に止まった。

悟空「今日はここで野宿かあ！」

悟空は半分はしゃいでいるが、俺は野宿なんてしたことない。勘弁してくれ。

ブルマ「野宿なんてしないわよ。 私とってもデリケートなんだから。」

俺「でも周りに家らしきものなんかないぞ？」

……出来れば家の一軒でもあって欲しいが…。

ブルマ「ホイホイカプセルがあるからいいのよ。」

俺「カプセル？　何だそれ？」

ブルマ「いいから！　投げるから離れて！」

言われた通りに悟空と俺は距離をとる。　ボンッ　と音と煙が出る、目の前にドームみたいなのが現れた。

悟空「お　お前、魔法使いだろ！？」

悟空が背中に身に付けていた棒でブルマに威嚇している。

ブルマ「何してんの？　入りなさいよ。」

俺「んじゃあ、お邪魔します。」

何とか悟空を家に入れ、俺も入った。　中は普通の家よりスッキリしているが、普通に過ごす位なら余裕だろう。　悟空は家電品を見るのが初めてなのか、家の中を色々見て回っている。　今はテレビに夢中だ。

ブルマ「晚ごはんの前にお風呂に入らなきゃね。」

悟空「オフロ？　オフロって何だ？」

嘘だる悟空、風呂を知らないなんて。　俺も驚いたが、ブルマは不潔扱いしてギャーギャー言ってた。

ブルマ「ほら、洗ったげるからこっち来なさい！」

まず一番に悟空、次に俺、ブルマの順に風呂に入る事になった。

悟空は、まだ小さいのでブルマが洗ってあげるようだ。

ブルマ「はい、背中向けて！」

しばらくやり取りを見ていると、腰と尻の間に尻尾がはえている。

え？ 悟空は人間だよな？

ブルマ「あんだ、こんなアクセサリくっつけてんの！？ 邪魔だからとるわよ？」

ブルマは尻尾を抜こうとするが、全く抜けない。 しかも悟空は痛がってるし。

悟空「いてーよ！ 尻くらい洗えるよ。」

ブルマの手からブラシを取り上げる 尻尾で。

俺・ブルマ「ええええー ……！！！！！！」

第五部・尻尾？（後書き）

今回で悟空は人間にはあり得ない尻尾が見つかりました

実際に見つけると多分目を疑いますね

第六部・明るき少年（前書き）

頑張って単行本読み返しながら……って感じですよ。

第六部・明るき少年

ブルマ「シ…シ、シッポが…はえてる…。」

俺「…。」

ブルマは腰を抜かし、俺は空いた口が塞がらない。　　なんで人間に尻尾があるんだ!?

悟空「尻尾に驚いたんか？　　男ははえてんだぞ？」

俺「はえるか！　　少なくとも俺は無いぞ！」

悟空「そういえば、じいちゃんは尻尾無かったな…。」

ブルマ「そうでしょ!？　　はえてないでしょ!？」

悟空「じいちゃん変わり者だったからな」

ブルマ「おかしいのはあんたよっ!!!」

悟空「まっ、どっちでもいいや。」

ブルマ「性格軽いわね。　　エド君はもちろん無いわよね。」

俺「無い無い無い！　　俺は大丈夫だから！」

…あつたら正直嫌だよ？

まあその後は俺が風呂に入り、ブルマが風呂に入った。しばらくすると、風呂場から石鹸やらブラシが飛んでくる。後悟空も走ってくる。絶対覗いたたる…。

俺「悟空、それはやっちゃいかんだろ。」

悟空「なあエド、女って首の下にシリがあって変だな。」

エド「女はそうゆうもんだ。　　そういえば悟空は何歳なんだ？」

悟空「オラは14だ。」

俺「4つ下か。　　悟空、もう覗いたらいかんぞ？」

悟空「ノー、わかった。」

まさか14だとは。　　なんか10歳位だと思ってた。　　案外歳近いし。その後は晩御飯を食べ、（悟空は食い足りないのか狼を捕って丸焼きにして食った）やっと就寝だ。　　ちなみに、ベッドは一つなので自動的に俺と悟空は毛布を床に敷いて寝ることになった。

ブルマ「そういえば孫くんはおじいちゃんと住んでたんでしょ？」

　　親はどうしたのよ？」

悟空「よくわかんねえ。　　オラ赤んぼの時に捨てられてて、じいちゃんが見つけて拾ってくれたんだ。」

文にするとかなり深刻な話なんだが、話す張本人はめっちゃ笑顔で話してる。　　なんて明るい奴だ。

ブルマ「きつと尻尾がはえてたから捨てられたのね…。それにしても、暗い過去をよく明るく打ち明けるわね!。」

悟空「お前はシリが二つあるから捨てられたのか?」

ブルマ「シリじゃないっての! 大体捨てられて無いわよ! あと、エド君はなんであんなここに居たのよ?」

俺「俺は…正直わからん。自分がエドで18歳という事しかわからないんだよ。」

ブルマ「あんたも色々あるみたいね。エド君が孫君みたいに常識を知らない人じゃなくて良かったわ。」

俺「まあ…そうですね。」

つてか…こいつ寝るの早っ。

横を見ると悟空はもう夢の中だった。

今日は色々あったな。明日からどうなるんだろう。

不安は沢山あったが、すぐに寝てしまった。

第六部・明るき少年（後書き）

神様」と言うわけで、エドは一日を終えたわけで、これから始まりを迎える訳だ。

ところで、なんで神様があとがきにいたって？ エドに滅多に呼ぶなって言っちゃったから…。

とりあえず、今回からワシが後書きコーナーをしきるので期待して待つとれよー？」

第七部・た、玉がねえ！（前書き）

……まだ10分しか書いてなかったのか…。

第七部・た、玉がねえ！

悟空「うわぎゃ〜〜〜つつつ！！！！」

モーニングコールはバカデカイ悟空の悲鳴だった。

俺「あぁっ！？…何だ？」

ブルマ「えっ！？ な、何かあったの！？」

見ると、悟空が怯えているような感じだった。

悟空「た、た、たまがねえ…！」

タマ？ なんの事だ？

すると、ブルマが慌ててバッグを確認している。

ブルマ「なによー、ドラゴンボールちゃんとおるじゃない。あー
ビックリした。」

ドラゴンボール…？ 何それ？

俺には聞いた事の無い単語だった。

俺「ブルマさん、ドラゴンボールって何ですか？」

ブルマ「ああ、まだ言ってなかったわね。このボールを七つ集めると何でも願いを叶えてくれるのよ？」

俺「へ〜、便利だなー。」

まあ今は叶えて欲しい事は無いからあんまり興味は無いけど、ドラゴンボールにはめっちゃめっちゃ惹かれた。

悟空「なあー、まだなんか？ オラ腹減ったー。」

俺「一日位化粧なしでいいでしょー。」

悟空「あんまり遅いと亀になるぞ？」

ブルマ「うるさいわね。あんた達が早すぎるのよ。それに化粧は女性の専売特許よ。」

そう言われても…。　あなたはこちらをどれだけ待たすんですか…？

悟空「…オラ体操してくる。」

遂に悟空が痺れを切らして外に出てしまった。

俺「ブルマさん、俺もちよつと先に外行ってます。」

ブルマ「わかったわ。」外に出ると、悟空が岩を軽々と持ち上げている所だった。　そして粉々にした。

あ…あり得ねえ。　でも恐竜を倒す位ならおかしくはないか。

悟空は更に次の岩を破壊しようとしている。　俺は暇だからさっきの岩の破片で的当てでもやろうと思った。

これでも少年野球のレフトだったからな？
いい的（岩）が見つかり、ピッチャーになりきって思いきり投げた。

BAKKOOOON!!!

見事に岩にあたった。そして粉々になった。

俺「……ええええー！！！」

第七部・た、玉がねえ！（後書き）

神様「どうも、神です。 思ったんだけど後書きコーナーが一人で持たないんで作者もまきこんでやります。 出てこい作者ー！」

……ボン！

作者「ゲホッ、ゲホッ。 何なんだ。」

神様「暇だから呼んだ。」

作者「作者だぞ？ 勝手に呼ぶなって。」

神様「まあまあ、こんなんでやっていきます。」

作者「お前が仕切るな！」

第八部・俺…強くな？（前書き）

前回のミス書き、すいませんでした

第八部・俺…強くな？

俺「マ、マジかよ。」

普通は小石の方が碎けるのだが、岩も碎けると言うことは超がつくほどのパワーを手に入れたと言うことだ。

まさかね…岩が脆かったに決まってるっしょ。とりあえず、もう一回やってみよう。

今度はもっと大きい岩で試してみた。

俺「どおりや、やや　　！」

BAKKOON!!

大岩が碎けた。　　間違いない…俺も悟空みたいにバカ強くなれるわ。

その悟空は更に次の岩を破壊しようと走っている。

俺「あれと一緒にかあ…。」

少なくとも、頭は確実に勝ってるからな?????「わあっつ!!」

悟空「え!?!」

悟空の方を見ると、何だろっ。

亀?

亀がいる。

何故?

亀「ハアツ、ハアツ、あービックリしたー。」

悟空「あいつ、ホ……ホントにカメになっちゃった。」

あり得ん。　いくら化粧が遅くても亀にはならんだろ。

ブルマ「なーに？　あんた誰と話してんの？」

玄関からブルマが出てきた。

ブルマ「ん？　何コレ、カメ？」

悟空「お前じゃないのか。」

ブルマ「アホー!!」

亀「すみません、塩水を一杯頂けませんか？　出来ればワカメも添えて。」

ブルマ「贅沢な亀ね。」

亀「ぶはーっ！　ありがとうございます。」

バケツ一杯を飲み干すと亀は話始めた。

亀「実は私……」

亀です。」

ブルマ「見りゃわかるわい!!」

流石に俺もずっこけた。話が長くなるので割愛するが、海ガメなのに松茸狩りに来て一年も道に迷い続けていると言っことだ。

ブルマ「ここから海って120キロよ?」

海ガメ「ひゃ、120キロ!?!」

悟空「オラ達がウミってとこに連れてってやるよ。」

海ガメ「本当ですか!?!」

俺「確かに、今のままでと可愛想だな。」

ブルマ「何言ってるのよ！ あと30日しかないのよ！ 急がなきゃいけないんだから！」

悟空「さっきまでのんびりしてたじゃんか。「ブルマ」ほっときなさいよ！ 関係無いんだから。」

悟空「じゃあオラだけで行ってくる。」

こうなったらこの二人は止まらんわ。 でも俺は海ガメは助けたいな。

ブルマ「勝手にしなさいよ！！ その代わりに、もう二度と私の前に顔を出さないで！！」「悟空」よっと。」

海ガメ「すいませんねえ……。」

悟空は海ガメを背負うと、数分で見えなくなった。

ブルマ「アホー！ 田舎者ー！ どっかいつちやえ！ 」

俺「いいんすか？ ブルマさん。」

きつと何だかんだで不安だし、心配してるに決まってる。 俺も行きたいし。

ブルマ「…考えてみたら、ドラゴンボールの1つはあいつが持ってたんだわ……。」

しばらく考え込むとポケットからカプセルを取り出し、バイクが出てきた。

俺「悟空が心配？」

ブルマ「馬鹿言わないで、しょうがないから私も着いていくだけよ？」

ブルマはバイクにまたがると、全速力で走っていった。

俺「嘘下手だな。。。」

……あれ？ 俺は？

俺「ちょっと、置いていくなよおおおお

！」

第八部・俺…強くな？（後書き）

作者「えー、前回の終盤になんかミス書きをしてしまいました。申し訳無いです。」

神様「こんな作者に描かれているワシは恥ずかしい。」

作者「すいません。」

神様「もう作者くたばれ。」

作者「………すいません。」

神様「やーいやーい作者の阿呆ー。」

作者「貴っ様ー！！！」

神様「わあ~~~~~！！！」

第九部・悟空の強さ（前書き）

お久しぶりです。

ってか遅すぎですいません…。

第九部・悟空の強さ

数分ほど全力疾走すると、ブルマと海ガメを背負って走る悟空に追いついた。

俺「ちょっとブルマさん！ 落いてけぼりは無いでしょ！」

ブルマ「いいじゃない。朝のトレーニングよ。」

…もういいや。

どれくらい時間が経ったかわからないが、何となく潮の香りがしてきた。

悟空「なんか変な臭いがするぞ？」

俺「潮の香りだ、海は近いぞ。」

その時、草むらから5〜6m級の二本足の鎧兜を身に付けた犬が出てきた。片手には大きな刀を持っていて、明らかに良い出会いではない。

犬野郎「おい、そのボウズ！ その亀を俺に渡しな！ 大好物なんだ。」

ブルマ「ひええー。ど、どうぞっ！ 孫君、早く亀を渡して！」

ブルマと海ガメは明らかに焦りまくっている。 対する悟空は、

悟空「お前何かにやんないよー。」

と言って、あっかんべーをしている。

犬野郎「そうか。ならお前をいたただこう。」

犬野郎が刀を振りかぶり、一撃を食らわそうとしていた。こんなもん避けてカウンターでも喰らわせてやる。

悟空「エド！こいつ持ってるー!!」

悟空が海ガメを投げてきた。
なるほど……。キラーパスじゃねえか!!

ギンツ!!

あ…あぶねえ。ちよつとでも遅れたら真つ二つだった。あのアホ!

犬野郎「ふふふ、お前らよく俺様の剣をかわしたな。」

よく見ると、いつの間にか悟空は犬野郎の背後にいた。

犬野郎「でえっ!!」

ぶあっ!!

犬野郎が悟空に向けて刀で切りつけるが、風を切っただけだった。

悟空は避けただけではなく、刀の上のっかっている。そして犬野郎の鼻の上に飛び乗ると、

悟空「じゃん拳　グー!!!」

強烈なパンチを眉間に放った。その間約三秒。あまりの早さに皆ポカーンとしている。　　ってか俺もどうやって刀に乗ったのかわからなかったし…。

悟空「おい、お前美味しいのか？」

海ガメ「め、滅相もない！　とても不味いって評判です!!」

悟空「ふーん、そっか。」

…こいつ美味かったら喰うつもりかよ…。

第九部・悟空の強さ（後書き）

神「はい、ではまず何故今回は一ヶ月も更新が遅れたのかな？」

作「今回は、作者が就寝試験だったので遅れました。勉強をしないと大変でしたので、更新が出来ませんでした。」

神「では、何故事前に報告をしなかったのかな？ ほっれんそう（報告、連絡、相談）は大切だよな？」

作「……忘れてた。」

神「……。で、合格したかの？」

作「……」

神「……」

第十部・浦島太郎（前書き）

ちゃんと書きましたよ？
短いけど……。

第十部・浦島太郎

あの犬野郎を倒してから30分後、潮の香りがしてきた。

俺「海ガメ、海は近いぞ。」

海ガメ「本当ですか!？」

左に緩やかに曲がる道を進むと砂浜と海が見えてきた。

ブルマ「やっと着いたわねー。」

海ガメ「本当にありがとうございます!」

海ガメを波打ち際に降ろすと、頭を何度も下げた。

海ガメ「ちょっと待ってて下さい。 お礼をします。」

そう言うと海に潜っていき姿が見えなくなった。

俺「なんか、浦島太郎みたいだな。」

悟空「浦島太郎ってなんだ?」

俺「まあ亀を助けたお礼に竜宮城まで行って、お土産の箱を開けた

ら禿げたじいさんになっちまったって話だ。」

悟空「ふうん。なんかおもしろいな。」

まあこれまでの悟空からすると浦島太郎は知らんな。それから海を見たことがない奴が海を飲んだり、砂浜に絵を書いたり、石で水切りしたりして待った。

俺「…？　なんか来たぞ？」

水平線から何か来る。

何だろう？

亀と…何だあれ？

悟空「おい、さっきの亀が戻って来たぞ？」

悟空も見えてるようだ。
か見えないだろう。

まあ一般人のブルマには小さな点にし

そして、海ガメは砂浜に着いた。

じいさん「ハロー！！」

一同「……」。

スーパーハワイアンなじいさんみ連れて。

第十部・浦島太郎（後書き）

作「お待たせしました。」

神「まあ前回よりかはましな早さだな」

作「まあ前は迷惑かけたからね、今回は頑張りました。」

神「まあ、今のままだと完成に十年かかりそうだが。」

作「真剣に悩んでるんだけど、いつそのこと飛ばしてしまおうかと」

神「貴様は数少ない愛読者の期待を裏切る気か!？」

作「まあ飛ばすにしても難しい。天津飯やピッコロ大魔王、マジユニアが出てこなくなるから。」

神「言つとくけど、ヤムチャだけは忘れるなよ?」

作「……。まあ頑張ります。」

第十一部・贈り物（前書き）

後書きにミニ発表がございます！

第十一部・贈り物

なんだこのじいさん。なんか甲羅背負ってるし、仙人が持ってそ
うな杖は持つてるし、ハワイアンな半袖短パンとサングラス、しか
もハゲ。一体何なんだ？

じいさん「カメを助けてくれたそうじやの。」

悟空「しいちゃん、なにもんだ？」

亀仙人「わしは、亀仙人じゃ！」

マジかよ。 こんなのが仙人かよ。

亀仙人「助けてくれたのは誰じゃ？」

海ガメ「こちらのお坊ちゃんの方です。」

そう言っつて悟空を指す。

亀仙人「そうかそうか、ご苦労さんじゃったな。 ではお礼にステ
キなプレゼントをあげてしまおう。」

悟空「プレゼント？」

すると、亀仙人は杖を天に掲げ、叫んだ。

亀仙人「来いつ、不死鳥よ!!!」

.....あれ？

ブルマ「.....何も来ないわね.....」

辺りを見回しても、変化も何かが来る気配もない。

海ガメ「...あのー、不死鳥の奴は食中毒で死んだんじゃ.....」

亀仙人「そうか！　　そういえばそうじゃったな.....」

ブルマ「不死鳥なのに死んだの?.....」

亀仙人「ウーーム…不死鳥を呼んで永遠の命をやるうと思ったのじやが……では、かわりに…」

来るんだっ、筋斗雲よ　！！！！」

………ん？　何か来た。

空の彼方から、小さな点が近づいて来る。その点は、ほんの数秒で俺達の前に来た。

俺「何だ、雲か。」

亀仙人「何だとは何だ！　これは筋斗雲じゃ。」

悟空「これ、食べるんか？」

亀仙人「ありがたい雲を食うな！」

まさにボケ倒した。

亀仙人「筋斗雲はな、良い子だけが乗れる雲なんじゃ。わしが見本を見せてやるう。」

と、勢いよく筋斗雲に飛び乗った。

はずだった。

ズボッ

ごくふつと雲を突き抜け、腰から豪快に落ちた。

絶対痛い。あんな綺麗に腰から落ちるなんて思っただけに亀仙人はかなり痛そうだった。

亀仙人「おかしいな……。若いときは乗れたのに。」

悟空「オラが乗ってみる!!」

悟空が飛び乗ると、なんと乗れた。

悟空「わ〜い乗れた乗れた〜っ!!」

俺「良かったな悟空。」

何となくこいつだけはもともとから乗れそうな気がした。

悟空「それ　　！」

あっという間に筋斗雲で飛び回り始めた。　　いいなあ…欲しいな

あ…。

そして戻ってきて

悟空「どうもありがとう!」

亀仙人「うむ、天晴れ。　中々の雲さばきじゃ。」

また飛んでった。

ブルマ「ねえねえおじいさま、私にもあれちょうだい!？」

悟空が飛び回る姿を見て欲しくなったのか、ブルマが亀仙人にせがむ。

亀仙人「そのギャルもお前を助けてくれたのか？」

海ガメ「いえ、全然。」

ブルマ「なによ、塩水あげたじゃない！」

実際、犬野郎の時は海ガメ見捨てかけたよな？ コイツ…。

亀仙人「あいにく筋斗雲はあれ一つでな、代わりに何かやってもいいのじゃが…。」

…マジかよ…俺も筋斗雲欲しかったのに…。 一個しかないのかよ……。

俺のテンションはほぼ垂直に落下した。 そして、俺の耳にこの
場面で適してないワードが出てきた。

「パ、パンティーを見せてくれたらな」

……誰だ言った奴 ！

顔を上げると、驚く海ガメと顔を真っ赤にしたブルマと鼻の下がギネスに載るくらい伸びまくったジジイがいた。 ……コイツだ。

悟空「オーイ！ エドー！」

ん？ 悟空が呼んでる。 とりあえず、この場はまだ真面目な海ガメにまかそう。

俺「どうした悟空ー？」

悟空が俺の前に降りてきて

悟空「エドも筋斗雲乗ってみろよ！」

俺「乗らせてくれるのか！？」

めっちゃ嬉しい。 俺も乗りたかったんだ！。

だが彼は考えていなかった。 筋斗雲に乗れる程自分は良い子なのかを……

第十一部・贈り物（後書き）

神「んで、ミニ発表って何だ？」

作「今回の小説の主人公のエドの技ですよ。」

神「だから更新が遅れたわけか……？」

作「……そう言うことにして下さい。」

作「とりあえず、かめはめ波系を一つ、連続気弾系を一つ、近距離戦闘術系を一つ、それぞれの名前 ってどこかな。」

神「なるほど、名前は何だ？」

作「今言つと楽しみ無くなるだろ……！」

神「……クソっ……（ボソリ）」

作「なんか言つたか？」

第十二部・良か否か（前書き）

ペース上げます！

第十二部・良か否か

俺「よいしょー！」

俺は勢いよく筋斗雲目掛けて跳んだ。　　するとどつだろつ、見事に腰から落ちた。

俺「グハッ！！」

悟空「エド、お前悪い奴だったのか！」

俺「まてまてまて！　もう一度乗せてくれ。」

嘘だ！　一応俺は真つ当に生きてきたはずだ！　授業中寝たりとか、テストで赤点とったりとか、バイト先でつまみ食いを抜けば！　もう一度、今度はゆっくり乗ってみた。　すると、乗れた。　確かに乗れている。

俺「よっしゃ、乗れたぞ！　うわっ！！！」

乗れたと思ったら、脚が抜けた。　だが完全に落ちたわけではない。　はまっている状態だ。

俺「な、なんでこうなる？」

悟空「エド、やっぱり悪い奴か？」

俺「違う！　悪い子は落ちる。　良い子は乗れる。　だから俺は良

くも悪くもない子だ！」

そうは言うが、実際筋斗雲に乗れないのはへこむ。絶対乗れる
と思っただのに……。でも悟空は俺の言い訳に納得してるし。

……だから乗れるのかな？

ブルマ「ちょっと孫くーん！、エドくーん！」

俺「なんかあったか？ とりあえず行こうか。」

悟空「おうー！」

ブルマの所へ行くと、何やらオレンジ色の球で興奮している。
宝石かと思ったがどうやら違っらしい。

悟空「あーっ！？ドラゴンボールだ！」

ブルマ「ね？ね？」

俺「これが……ドラゴンボール？」

思ってたより少し大きいくらいだった。しかも、

悟空「星三つだから三星球っちゅうやつだな」

名前まであるらしい。

ブルマ「ラッキー！海の中だったら見つけるのが大変だったところよ！」

亀仙人「ソレをやるとはまだいつとらん。」

亀仙人はちよつとだし惜しみしている。

俺「頼むよ亀仙人さん。」

ブルマ「いいじゃない！ほら！ほらっ！ほらっ！！！」

すると、あるうことがブルマがワンピース型のパジャマの裾を上げてさらけ出した。しかも下着を履いてねえ！

俺「お……お……おい……。」

俺は言葉が出なかった。つか出せたらスゲーよ。

亀仙人「…よかるう。あげる。」

鼻血が完全に出まくっている亀仙人。

もうエロジジイだろ……。少しは制してやれよ。

とまあ何だかんだで4つ目のドラゴンボールを手に入れたらしい。

あと三つだ。

俺「どうしたあっ！」

俺と悟空は急いでブルマの所へ向かった。

第十二部・良か否か（後書き）

神「感心だな。お前がこんなにも速く更新するとは。」

作「頑張りましたよ、誉めて誉めて。」

神「……まあそれはおいといて。」

作「置くな!？」

神「一体、ブルマに何が起きた?」

作「ドラゴンボール好きなら簡単に解るでしょう、ヒントは履物、かな?」

神「……ヒントのセンスないな。」

第十三部・被害者（前書き）

累計

PV・11,786アクセス
ユニーク・1,500人

パソコン

PV・4959アクセス
ユニーク・968人

携帯

PV・6827アクセス
ユニーク・532人

涙が止まりません……。

第十三部・被害者

ブルマの所へ駆けつけると、青い顔をして何やら布？絹？みたいな
のを持っているブルマがいた。

ブルマ「パ……パンツが……。」

パンツ？　　そういえば履いてませんでした。

悟空「そう気にすんな！　チンやキンタマがなくなっただって生きてい
けらー！」

青い顔のブルマとは違い超スマイルな悟空。

ブルマ「ど、どういうこと？」

悟空「今朝見ちゃったもんね。」

ブルマ「ま……まさか、アンタがパンツ脱がしたの？」

悟空「パンツって何だ？」

ブルマ「これよ……！」

ブルマは布を悟空の前に突き出した。　　無論、女性用下着であった。

悟空「ああ、オラがとった。」

ヤバイ！　このままではブルマが悟空を殺しかねん！

俺「ま、まあ。悟空は悪気があった訳じゃないし、筋斗雲に乗れる位いい子だから。」

悟空「エドのきんた枕はちょっと良かったぞ？」

俺「そうそう、ブルマさんのより俺の方が……今なんつった？」

俺にきんた枕……まさかだよな……。

悟空「エドにはちゃんと金玉あったぞ？」

俺「お前俺の見たのか　　！」

ガツンッ！！

とりあえず一発な……コイツは

……ガチャリ……スチャツ……。

悟空と振り返ると、弾の数が尋常でない程に装填されたマシンガンを持つブルマ……。

悟空「乗ってみる？」

無理だろ、さっきまで俺達を殺そうとした奴だぞ？
乗れたら俺が立場なくなるわ……。

ズボツ！ ばん！

悟空・俺「それみる。」

ブルマは顔面から地面に突っ込んだ。

ブルマ「ど、どうしてかしら。 何故……？ 美しすぎることも罪なの！？」

ずっこけた。 何故そこまで気付かない……。
俺はあきれ返った。

悟空は筋斗雲に乗り、ブルマはバイクに乗り、俺はひたすら走る。
何故走るかって？ トレーニングだろ！ 俺も鍛えれば強くなれる……そう思ってひた走る。 ってか足の速さバイクに勝ってるし。

悟空「のろいなあ。」

俺「もっとスピード出んのか？」

ブルマ「うるさいわねっ！！ あんた達スピード違反よっ！！！！」

俺達は、ドラゴンボールを探しに更に西へ進む……。

第十三部・被害者（後書き）

神「こんなにもこのクソみてーな小説を閲覧している人がいるとは……。」

作「感謝の嵐です。正直これで誰も見てなかったらこの小説辞めよっかなって思ってたのに……。」（泣）

神「ワシもありがとうを言わせてほしい。」

作「とにかく、皆さんの為に頑張って執筆させてもらいます……！」

神「頑張れよ。今回は応援するぞ？」

作「……お前超意外にいいジジイだな。」

神「滅ぼすぞてめえ……。」

第十四部・第一村人発見！（前書き）

なんと、まだ一巻の半分！？

第十四部・第一村人発見！

―三日後―

悟空「近いのか？」

ブルマ「かなり近いわね。　すぐそこよ。」

俺「まずその電子地図みたいなの教えてくれ。」

悟空とブルマはわかりきったように見ているが、俺はさっぱりだ。

俺の知っている地球だと見たことがない。

悟空「これドラゴンレーダーって言うんだ。」

俺「？」

ブルマ「ドラゴンボールから出る電波を受信して位置を出すのよ。」

私が作ったのよ？」

俺「スッゲー！」

ドヤ顔は軽く気に食わんが、性能は申し分ない。

悟空「あそこに家が沢山あるぞ？　あそこかなー。」

ブルマ「村か…多分そうだわ！ 行ってみよ！」

—————

村には着いたが、まるで人がいない。　なんか怖いよな……。

ブルマ「静かねえ…誰も住んでいないのかしら。」

確かに、四方八方を見てもひとつこひとりもない。

悟空「いや、人の気配はするぞ!？」

悟空は筋斗雲で移動しながら一軒一軒見回る。

ブルマ「こんちは…誰かいますかー!？」

……………。

誰も答えない。　だがよく見ると、井戸から雫が垂れてたりして生活感はある。　みんな家の中にいるだけだと思っ。

悟空「沢山いるみたいだぞ。　確かめてやろうか!？」

筋斗雲から降り、8と書いてある家の戸を叩き始めた。

悟空「オーイ！　いるんだろ!？　なんで返事しないんだー!？」
ドアノブもひねるがどうやら鍵が掛かってるらしい。

ブルマ「鍵が掛かってるみたいね。」

悟空「よし。」

バキッ！

悟空「ほれ開いたぞ。」

ドアに穴をあけ無理矢理ドアを開けた。

悟空、お前捕まるぞ？

俺「すいませーん…？」

「？？？」と　　「っ！！！」

ガキッ！！

家の中からおじさんが斧を降り下ろしながら飛び出してきた。

本来であれば、悟空の頭に炸裂するはずだったが、エドが「すいませーん」等と無用に前へ出たため、エドの頭に…

俺「グアアア！！　頭があああ！！！」

炸裂した。

ブルマ「ひっ、ひえええ……!!」

悟空「おい!! エドに何すんだ!!」

悟空は怒りだし、背中に背負った棒を取り出し、俺の頭を力子割ろうとしたおじさんに殴りかかろうとしていた。

おじさん「す、すいませんでした、ウーロン様! お金や食べ物ならいくらでも差し上げます! ですから、どうか娘だけは! 娘だけは……!」

悟空「へ?」

ブルマ「ウーロン……?」

俺「だ…誰…だ…そいつ……。」

俺は目の前が暗くなった。

第十四部・第一村人発見！（後書き）

神「おい、お前今回の話ちよつとナレーション入っただろ。」

作「そ、そそそそんなわくないじゃないかあ、やだなあカミサマ」

神「そんなわくつて…お前酷いぞ？」

作「まあこんな感じで入らないとやってけないでしょ？」

神「んーまあいいだろ。ここ数話はちゃんと更新が出来てるからな。」

作「……ドヤ……。」

神「コイツ、ムカつくわあ……。」

第十五部・大和撫子十七変化！？（前書き）

本当は大和撫子は七変化なんですよねー！。

第十五部・大和撫子十七変化！？

頭が冷たい。　ん？

気がつくど、家の中のベッドに寝かされていた。　　って頭痛てえ。

女の子「大丈夫？」

俺「んー、ギリ大丈夫。」

体を起こすと、玄関先に沢山の人と、さっきのおじさんがいた。

おじさん「いやーすまんすまん。　てつきりウーロンの奴がこの子の姿に化けてるのかと。　しかもこの子ではなく君を殴ってしまったってホントにすまない。」

え？　　って事は、本来悟空の頭を狙っていたが、間違えて俺の頭を割ろうとしていたと。　　あはは、よくあるよくあるー……んなわけねーだろ……！！

ブルマ「私だったら死んでたところよ……！！」

おじさん「め、面目ない。」

……少しは心配してください。

……パンパン……

女の子「きゃあっ……！！」

悟空「お前女だろ！」

触って確かめるなよ！ 悟空！

案の定ブルマの拳骨が落ちた。

悟空「なっ、何するんだ！？」

ブルマ「パンパンすなっ！！」

悟空「??？」

俺「悟空、捕まるぞ？」

悟空「何でだよ？」

……ダメだこりゃ。

ブルマ「ところで、さっきから言ってるウーロンって何者？」

おじさん「ああ、ウーロンですか…。」

その瞬間みんなの顔から笑顔が消え、空気が重くなった。 どうやら相当深刻らしい。

おじさん「ウーロンはこの辺りに住んでいる妖怪で、様々な姿に変わる術を持つ恐ろしい奴で、本当の姿は誰も見たことはありません。」

更に話は続くようなので、簡単に説明するが、怖くて悪くてスケベ

野郎なウーロンが何人も村娘をさらっていくし、齒向かつと食い殺すと言つらしい。

悟空「そんな奴やつつけばいいじゃねえか。」

おじさん「とんでもない！　こーんなにデカイ奴ですぞ！」

多分、犬野郎並の大きさだろうな。　　多分余裕でしょ。

ブルマ「…そうだ！」

ブルマは自分のバッグからドラゴンボールを出す。

ブルマ「ねえおじさん、こつゆう球持ってない？」

おじさんは球を見るが見たことがない顔だ。

????「ほいな！　わたしやおなじもん持つとるぞい！！！」

玄関先の野次馬から一人のばあちゃんが出てきた。

ブルマ「やつぱりあった！！！」

おじさん「パオズばあちゃんが？」

どうやらそのパオズばあちゃんが持っているようだ。　流石に俺もいつまでも寝ているわけにはいかんからもうベッドから起きています。

パオズばあちゃん「これじゃる？」

その手にはドラゴンボール、星が6個のやつ、六星球だ。

ブルマ「どう、おばあさん？ ドラゴンボールを私達にしてくれるなら、ウーロンって妖怪、退治してあげてもいいわよ？」

超上から物言ってるよ…態度があかんって。

パオズばあちゃん「退治してくれるんはありがたいんだけども、女のお前さんにや、ちーと無理じゃないかね？」ブルマ「退治するのは私じゃないわ。こっちのエド君と…」

…パンパン…

悟空「あんたも女だろ。」

ああ悟空よ、ばあちゃんにまでパンパンをするのかい…？
すかさずブルマは悟空に一発。

ブルマ「見境いなしにパンパンすなっ！！」

ブルマのツッコミは悪いところはないが、ばあちゃんが照れていたのには鳥肌が立ち、寒気に襲われた。

おじさん「いやしかし…ウーロンを退治できても、住処がわからなければ娘達が…。」

ブルマ「いい考えがあるわ。 あなたの服を貸してくれない？」

女の子「えっ？ 私の服を？」

――

悟空「何でオラがこんなヒラヒラしたやつ着るんだよ!？」

数分後に悟空は女装していた。

ブルマ「いい？ あんたは女の子になりすましてウーロンの住処までついていくのよ！　そこでやつつけて捕まっている女の子達を助け出して。」

そして、ブルマがこっちを向き、

ブルマ「エド君は孫君だけじゃ心配だから、女の子の荷物持ち役をやって。孫君がピンチになったらあんたも戦うのよ？」

俺「初耳だけどやれるだけやろう。」

……ズシーン…ズシーン…

どうやら、ウーロンが来たみたいですね。

「ウーロンの奴がきたぞ!？」

ブルマ「さあ孫君、エド君、頼んだわよ!！」

そう言うと玄關の戸を閉め、悟空の作った穴から覗いている。

俺「ちょっと待て、お前は何もやらないんかい!！」

ブルマ「大丈夫。死なないように祈ってるから。」

俺「ふざけんな！ブルマも出てこいよ！」

ブルマ「ほら、ウーロン来たわよ。」

ボタン！

再び戸を閉める。

畜生、なんであいつだけ家の中なんだよ。

悟空「なあエド、やっぱ一発でやっつけていいか？」

俺「それじゃあ作戦立てた意味ないだろ。一応作戦通りで行くぞ。」

悟空「めんどくせえなあ。」

俺から見て、目の前から大きくてごっつい奴が来た。コイツがウーロンか。

ウーロン「へっへっへ お迎えに来ましたよ可愛いお嬢ちゃん！」

ちなみに悟空は背中を向けさせているのでわからないはずだ。

ウーロン「おい、お前は誰だ！？」

俺「ぼくはかのじょのもつもちです。けしてあやしいものでは

ありません。」

ブルマ（なんで棒読みなのよ！　　バレちゃうじゃないの！）

ウーロン「なんだ、荷物持ちか。」

ブルマ（バレないんかい！）

ウーロン「あらら？　お嫁さんになるのにその棒を持ってくのですか？」

悟空「そうだ！　早くつれてけよ。」

俺（ド素人かコイツの演技は！）

ブルマ（下手な演技ね！　あの二人じゃダメかも。）

実は自分の演技の下手さに気づいていなかったエド。　　だがそれ以上にアホだったウーロン。

ウーロン「ほらー怒らないでグレちゃだめ！　ボクちゃんホントはすっごく優しいんだからね！」

俺（気付かないんかい！）

すると、急に悟空が小刻みに震え始めた。　　一体、どうしたんだよ。

悟空（まずい…シヨンベンがしてえ！）

ウーロン「そうか！ この姿が怖いんだね？」

すると、

ウーロン「変化ッ！」

と同時に煙に撒かれて見えなくなり、見える頃には超ダンディーなおじ様になっていた。

ウーロン「これでいかがかな、お嬢ちゃん。それとも、ヤングマ
ンの方が良かったかな？」

声までダンディーだ。 たまげた。 だが所詮妖怪。 こん
な奴にホイホイ着いていく馬鹿女なんているわけないだろ。

ブルマ「は、はじめまして。 私ブルマと言います。 16歳で
えーっす。 えへえへ。」

……いた……。 馬鹿女がこんな近くに。

悟空と俺は思いつきりずっこけた。

ウーロン「ほお…バ、バストのサイズはいくつかな…？」

ブルマ「85!!」

俺（なんで会話が成立するんだ？ とりあえずあんなのほっとい

て悟空は？）

さっきの震えが少し気になる。

俺「悟空、なんかあったか。」

悟空「オラ、シヨンベンしてえ。」

俺「なんでさっきしなかつたんだ!? まあ今チャンスだからその木にしてこい。」

ウーロンの顔を見ると、鼻の下が伸びまくっている。

ウーロン（85か…パフパフが出来るな。でもオレより年上だな…でもいいな…。）

ウーロン（な、悩んじゃうな。プリティベイビーかプリプリギヤルか…二人とももらっちゃおかな…それがいいな!…）

ふと、プリティベイビー（悟空）を見るが、なんと立シヨンをしている。

ウーロン（なんと、なんとという大胆な。若い娘さんが立シヨンとは…!! 一体、どうやって…）

少しずつ悟空に近づき、確認する。

俺「ま、待てウーロン! 見るなあ!」

だが彼は見てしまった。プリティベイビーに絶対についていないアレを。

ウーロン「ぐおおおおおお〜！！！！！！ オ、オレの大嫌いなモノがついている〜〜〜〜！！！！」

俺「バ、バレたか…。」

ウーロン「おっお前昨日の娘じゃないな〜〜〜っ！！！！！！」

悟空「えっ！？ パンパンしてないのによくわかったな。」

そりゃそうでしょ。 アレを見れば。 どうやらウーロンは完全にキレたようだ。

ウーロン「お…お…おのれ〜…よくもこのウーロン様を騙したな〜…。 変化っ！！！」

俺（また、変身するのか！！）

煙が消えると、目の前に巨大な牛が現れた。 正確言つなら闘牛か猛牛か。

ウーロン「おいつ！！ オレを怒こらせるとめっちゃめっちゃ怖いんだぞ！！！！ 強いんだぞ！！！！」

ブルマ「はっ！？ いけないっ！ 私ったらいい男を見るとつい…」

我に戻ったか、急いで家の影に隠れる。

…性格直してください。

おじさん「これはマズイですぞ。 作戦はダメになったしウーロンを怒らせてしまった！」

おじさんはめっちゃ慌てるが、

おじさん「でも安心だ。 あの娘さんがお前の代わりに嫁になってくれる。」

ブルマ「勝手に決めないでくれる！！？？ 化物となんてごめんだわ！？」

俺（さっきバスト公表してなかったか？）

ブルマ「孫君・エド君、作戦変更よ！ ウーロンを殺さないようにやっつけて！」

悟空「へへ、最初からそうすればよかったんだ！」

早くも衣装を脱ぎ捨て、準備万端である。 俺はそのままの服装だからそのままかまえる。

ウーロン「ムダなことは辞めて昨日の娘を連れてこい。 そうすれば許してやる。」

悟空「あっかん、ベー！」

俺「お前なんか許されてたまるか！ この牛っ！」

とりあえず、悟空とエドは半分おちよくっているようだ。

ウーロン「お前ら…完全に俺様を舐めとるだろ…。」

悟空「どすこーい!」

俺「かかってこいやあー!」

遂にウーロンと戦う時が来たようだ。

第十五部・大和撫子十七変化!? (後書き)

作「大和撫子は十七変化じゃなかったのか!？」

神「知らなかったのか? あのゴツい三人娘のせいで間違える若者が多い。」

作「お前と世代がまるつきり違うんだよ。このクソジジイ。」

神「……天罰!！」

ズズズズズズ!!!

作「ギャー!!!!!!!」

神「神をなめんなよ? 伊達に数世紀やってねえから。」

作「……。」

第十六部・牛、豚、何コレ？（前書き）

また遅れたってゆっね…。

第十六部・牛、豚、何コレ？

ウーロン「むふふふ…謝るなら今のうちだぞ。」

悟空「よーしかかってこい！」

俺「今回は俺もやる。かかってこいウーロン。」

2対1なら余裕つしよ。

すると、ちらっとだけ別の方を見ると一目散に逃げた。

悟空「あつ！ 待て っ！」

悟空はすかさず追う。俺も追う。だがウーロンの見た方に

は時計台があった。どうゆうことだ？

ともかく村の入り口付近でウーロンを見失った。逃げ足速すぎ

……。村のどっかに隠れた訳でもないし……。

すると、不自然に口笛を吹く豚ちゃんがいた。

悟空「なあ、こっちにでつけえ牛が逃げて来なかったか？」

豚「ああ、あつちに行ったぞ？」

悟空「あんがと。逃げ足の速いやつだな。」

悟空はウーロンを探しに行ってしまったが、この豚、怪しすぎる…。
…。

俺「なあウーロン。」

豚「ん？ ……俺はウーロンじゃないぞ！…！」

こいつは詰んだな。

俺「そーか、ウーロンじゃないのか。」

豚「あ、当たり前だ！ よく見る。」

俺「ああ、すまんかった。」

丁度悟空も帰ってきたので、一旦戻ることにした。

豚「や、やべえ。 あいつにはバレてる。 この可愛い子豚ちゃんがウーロンだって事が…！…！」

ウーロンは顔から汗が吹き出るが、すぐに名案が浮かぶ。

ウーロン「迫力がイマイチだったんだ！！ 今度はビビって逃げるくらいのにしてやる。」

ウーロン「変化っ！…！」

――――
ウーロン「わははははは！！！ このウーロン様が逃げるわけない
だろ！ さつきはちよつと用事を思い出していただけだ！！」

俺（牛で豚で次のは何だコレ？ ロボットか？ しかも箸と熱
湯が入った茶碗、読めない…。）

悟空「おめえさつきから化けてばっかで本当に強いんか？」

ウーロン「あ、当たり前だ！ 俺様は世界一強いと言われているん
だぞー！」

だがウーロンの背後には、小さなスナイパーがいた。 坊主はパ
チンコでウーロンを狙撃した。

ウーロン「あだっ！！ バッキャロー！！ 子供をちゃんと見
とれ！！！！」

俺（俺や悟空なら絶対痛くねえ。 こいつはやっぱりさつきの豚野
郎だ。）

俺「なあウーロン、早くやらねえか？ ボコボコにしたいくてたまん
ねえんだ…。」

指を鳴らしながら言ってみたが、結構効果があったらしい。

ウーロン「…なら、こいつを素手で割れるか？」

脅した俺にではなく悟空に問いかける。 しかも出したのはレンガ三個。 馬鹿にしてんのか？

悟空「こんなの指一本で割れるさ。」

人差し指だけでレンガを粉々にする悟空にウーロンは声が出なかった。 更に俺が追いうちをかける。

俺「やんのかやんねえのか、はつきりしやがれ！！」同時に地面を思いつきり踏みつけた。 すると、舗装された路面が砕け散り、明らかに村の一部を完全破壊してしまった。

俺（やべえ、ちょっとやらかした。 でもいい脅しにはなったかな？）

ウーロン「……フフフフフ……」。

ウーロンは不気味に笑う。

俺（馬鹿な！？ 何故笑ってられる？ コイツもしかして本物か？）

ウーロンは笑うのを止めた。　そして、

ウーロン「変化っ!!」

コウモリになって背を向けて飛び去っていく。
なんだ。　ただビビってただけなのか。

俺「行っちゃった……。」

ブルマ「何してんのよ!　早く追いなさいよ!」

ブルマに言われて気がついた。　ウーロン追いかけなきゃ。

悟空「筋斗雲　っ!」

悟空は呼び寄せた筋斗雲に飛び乗ると追跡するために飛んでいった。
筋斗雲便利だよな。

俺（俺もウーロン追わなきゃ。）

とにかく俺は走って追いかけた。　筋斗雲には及ばないが結構な
速さでひた走る。

ウーロン「くそー、もうあの村にはいけないなあ。　なんなんだ、あの馬鹿強いあいつらは。」

コウモリに化けたウーロンはぼやく。　ふと横に視線を送ると、レンガを割った奴がいた。

ウーロン「わっ!?!　変化っ!?!」

悟空「待て　　っ!」

ウーロンはコウモリからロケットに変身してスピードを上げるがピツタリとついてくる。　おまけに、

???「待ちやがれ豚野郎　　っ」

地上からは山や畑関係なく突っ走ってくる奴もいた。　地面を叩き割った奴だ。

ウーロン（なんて馬鹿げた奴等だ。　やべえ、もう時間が…。）

ボンッ!

とうとうウーロンの変身時間が終わってしまい、豚に戻ってしまった。

悟空「お前だったのかー。」

ウーロン「一体、何なんだお前ら……。」

悟空に捕まり、ゆっくりと降りていく。そして下にはエドが待っていた。

俺「わかっているなウーロン？」

ウーロン「え？何が？」

俺「悟空、とりあえず村に戻ろう。」

かくして村に戻り、次はウーロンを連れてウーロン宅に迎う村人一同。もちろんウーロンは縄で縛っている。だがウーロンはあきらめない。

ウーロン（隙を見てありに化けて逃げてやる……。）

だがその目論みも直ぐに絶たれた。

悟空「ありに化けたら踏み潰すからな。」

ウーロン（クソ、見抜かれたか。じゃあ蚊にでも化け）

俺「蚊とかにでも化けたら全力で叩き潰すからな。」

ウーロン)……。)

結局いい案が浮かばないままウーロンの家についてしまった。

第十六部・牛、豚、何コレ？（後書き）

神「お前反省してないだろ」

作「反省はしてますよ？」

神「お前のおかげでなんだか後書きがパターン化してきたよ……。」

作「じゃあ、エド君の必殺技をもうひとつ作る？」

神「どうでもいいからもつと早く書け。」

作「……ごめんね？」

神「許すわけないだろ

っ！」

第十七部・叩き売り（前書き）

最近めつきり寒くなりました。

第十七部・叩き売り

ブルマ「あんた、生意気な家に住んでるのね。」

目の前にあるのがウーロンの家なのだが、豪邸並の家だ。

ウーロン「ふふふ……そこらじゅうから金を巻き上げて作った家なのだ！」

悟空「威張って言うな！」

とりあえず家に入ってみよう。中はとても広々としていて、まるで芸能人の一軒家みたいだ。

「ヘツジ　！　お父さんが迎えに来たぞ　っ！」

「ホツグちゃん！　ママよ　っ！」

「リー！　もう安心だぞー！」

皆口々に自分の娘の名を叫びながら探す。　良いことしたな。
しかし、待っていたのは現実だった。

「いいの、私たちの事ならほっといて。」

「畑仕事よりこっちの方がいいもーん。」

娘達は次々と身勝手な言葉を並べる。

ウーロン「…だから大人しい女の子が欲しかったんだ…。こいつらムチャクチャ贅沢するし…頼むから連れて帰ってくれ…。」

だがウーロンが頼んでも娘達は帰りがらない。何て奴等だ。

俺「お前ら、親の気持ちを少しでも考えたことがあるのか！」

つい言っちゃった。まあいくら年頃の女の子と言えども、こればかりは良くないだろ。一人、また一人と親の元へ帰っていく娘達。これで安心だ。おじさん「あの……。」

俺「ん？ どうしました？」

おじさん「村の修理代、払って欲しいんだが…。」

俺「修理代？ なんで払わなくちゃ……。」

忘れてた。俺ぶち壊したんだっけ？ あはは……。

俺「よし、この家を売り飛ばそう！」

ウーロン「何言ってるんだ！！ 俺の家だぞ！？」

悟空「どうせ巻き上げて作った家だからいいじゃねえか。」

俺「よし決まり。ブルマ、頼むからいますぐオークションでこの家を叩き売りしてくれ。」

ブルマ「なんであんたの事に首を突っ込まなきゃならないのよ!？」

どうやらブルマさんは乗り気ではないようだ。 ならば……。

俺「修理代より売値が高ければブルマのポケットマネーにしているぜ？」

ブルマ「今競売にかけたところだからあと5分待つて。」

早ええー！ー！ー！ー！！！！ 開くと同時に競売にかけたぞ!？

マネーの力は侮れん…。

その後、何やらギョウサンとか言う奴が競り落としたらしい。

しかも売値の三倍。 とりあえず助かった。 ウーロンは半泣きだけどな。

ちなみに、余ったお金はブルマさんに渡りました。

第十七部・叩き売り（後書き）

神「寒いのお……。」

作「はい、寒いです。」

神「おい作者、お前の力で暖かく出来んのか？」

作「逆にお前できそうたる。俺はコタツで十分。」

神「コタツと言えば？」

作「みかん。」

神「アイス。」

作「おかしいだろハゲ神！！ 冬でコタツつつたらみかんしかねえだろぅが！！」

神「馬鹿かてめえは！！ コタツって言ったらアイスだろ！！ お前なんかみかん喉に詰まってしまえ！！」

作「……プチッ……」

神「……ん？」

作「作者ノート……！！」

神「何それ？」

作「神の頭に、巨大な岩直撃……つと。」

神「なに書いてんだ…ほばあ！」

作「ざまあみやがれえつ。」

神「……………」。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1674w/>

DRAGON BALL - ページIn -

2011年11月10日08時04分発行